

平成30年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

未来社会を創造する主体に必要な資質・能力を育成するため、人格形成と能力育成の調和を重視した教育活動を中核に据えた場合の新たな領域等の枠組みを構築する研究開発

2 研究の概要

本研究で目指す、未来社会を創造する主体とは、自分の学びを見つめたり、仲間や多様な他者と共に力を合わせたり、自らの意志で社会を切り拓き、新たな価値を創り出そうとする子供のことである。この未来社会を創造する主体は、「向上性」「協働性」「創造性」の3つの資質・能力をもっている。このような資質・能力を育てるためには、教科等の内容に依存した知識重視（Knowledge base）から、真のコンピテンシーベースを目指す子供の文脈に沿った学習が行える人間重視（Human base）が必要である。ここで言う子供の文脈を重視するとは、子供たちの学ぶ欲求の中に、現代的課題に象徴される「社会の文脈」と学問体系から来る「学問の文脈」を含み混んだ、子供の学びの欲求を原動力とする「子供の文脈」を中心に位置付けていくことである。そこで求められる教育課程は、子供の文脈を重視した「にんげん」「くらし」「ことば」「すうがく」「かがく」「げいじゅつ」「けんこう」の7領域と個に合わせて主体的に内容の習得を目指す「たんれん」、個性を伸ばす「チャレンジ」を位置付けることであると考えている。

具体的には次の3つの教育課程の編成原理から考えていく。

- ① 子供の文脈を重視した内容の精選 ② 子供自らによる学びの選択
③ 子供の自己内省と省察の重視

この原理の中で、子供主体の質の高い学びを展開していくのが探求の学びである。具体的には、

- 要素(1) 真正の課題 要素(2) テーマ学習とトピック学習 要素(3) 学習のための評価

このようにして、今後の教育課程の在り方に関する検討に取り組み、本校としての提言をおこなう。

3 研究開発の目的と仮説

(1) 研究の目的

内閣府で示された「Society5.0」においては、人間がこれからの世の中を生き抜いていくために、「社会の変革（イノベーション）を通じ、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会、世代を超えて互いに尊重し合える社会、一人一人が快適で活躍できる社会」を目指している。このような要請に向けて、平成30年6月に第3期教育振興基本計画が策定され、2030年以降の社会を展望した教育政策の重点を次のように示している。「超スマート社会（Society5.0）の実現に向けた『人生100年時代』を豊かに生きていく、『人づくり革命』『生産性革命』の実現とともに、教育を通じて生涯にわたる一人一人の可能性とチャンスを最大化する。」このような変化の激しい時代においては、これまで以上に子供たち一人一人の資質・能力を十分に発揮させ、子供が主体となる質の高いの学びを大切に新たな教育課程の創造が必要とされると考えている。

本研究の目的は、未来社会を創造する主体に必要な「自分の学び方や在り方を深く内省し、自分のよさや課題も肯定的に受けとめ、これからの志を明らかにしていく向上性」「仲間や他者の考えに耳を傾け、自分と同じように尊重し、それらの人々とともに人や社会、自然のために力を合わせる協働性」「自ら課題を設定し、調査・追究する過程で自分の獲得した知をつないだり組み合わせたりしながら概念を発展させ、新たな知を創造する創造性」という3つの資質・能力を育成する子供の文脈を重視した教育課程における、探求の学びを究明することである。

(2) 研究仮説

次の2つから子供の文脈を重視した7つの領域の中での探求の学びの究明を行えば、未来社会を創造する主体としての資質・能力を育成することができるであろう。

◇ 子供の文脈を重視した7つの領域の教育課程の編成原理

原理1 子供の文脈を重視した内容の精選

子供の文脈を重視していく上で、社会の文脈と学問の文脈を取り入れることができるようにする。そうすることで、内容そのものの全体的な見直しをおこなう。

原理2 子供自らによる学びの選択

学びの選択を実現するために、①「チャレンジ」を新設する。4～6年生の子供たちの個性に応じた領域学習の発展的な学びを展開し、教育課程の中で子供たちそれぞれの個性を生かして、自分の資質・

能力を磨き伸ばしていくことができるようにする。②「たんれん」の充実する。子供の個性に合わせ、最適化させた学びを実現し、子供の実態に合った動的・静的な学習を行う。子供一人一人に合った学習を提供する。

原理3 子供の自己内省と省察の重視

自己内省とは、自分自身が立てた目標設定に向けて自分がどこまで高まっているのかということ自分の学びの足跡から俯瞰して観たり、自分自身で辿って観たりすること。省察とは、自分自身を観たことからどのように自分の行いや考え方に生かしていきたいのか思考することである。そのためには、①領域「にんげん」の「マイタイム」を中核にすること、②各領域での振り返りの日常化を重視する。

◇ 子供の文脈を重視した探求の学び

探求の学びの要素 (1) 真正の課題

真正の課題の条件は「①知のまとまり」「②たくましい追究」「③学校を超える価値」の3つから考える。具体的には、①子供たちが学びの中で既存の知識と学ぶ内容を構造化して、新たな知を構築することができるか、②子供たちが主体的に追究することができる身近さや重要性が高い自分事の課題となるとともに、仲間や他者との対話や協働が必要か、③子供たちがおこなう学びそのものが、現代やこれからの社会にとって価値あるもので影響を与えるものかの3つである。

探求の学びの条件 (2) テーマ学習とトピック学習

テーマ学習とは、子供たち自身でテーマを決め、数週間にわたる領域を横断した内容が関連した学びを展開していくこと。トピック学習とは、領域で重視する資質・能力にダイレクトに働きかけ、各領域の資質・能力が関連した学びを実現することである。この2つの学習で、探求の学びを実現させる。

探求の学びの条件 (3) 学習のための評価

4つの評価サイクルをトピックの中に位置付け、子供自身が自らの学びをPDCAサイクルで回すことができるようにする。

(3) 教育課程の特例

① 本校独自の資質・能力の規定

「向上性」「協働性」「創造性」の3つの資質・能力を規定する。「向上性」とは、自分の学び方や在り方を深く内省し、自分のよさや課題も肯定的に受けとめ、これからの志を明らかにしていく資質・能力のことである。「協働性」とは、仲間や他者の考えに耳を傾け、自分と同じように尊重し、それらの人々とともに人や社会、自然のために力を合わせる資質・能力のことである。「創造性」とは、自ら課題を設定し、調査・追究する過程で自分の獲得した知をつないだり組み合わせたりしながら概念を発展させ、新たな知を創造する資質・能力のことである。

② 本校独自の教育課程の編成

「にんげん」「くらし」「ことば」「すうがく」「かがく」「げいじゅつ」「けんこう」の7つの領域と「たんれん」、「チャレンジ」によって教育課程を編成する。新教育課程における年間授業時数を比較すると次の通りである。

【表1 平成30年度 年間授業時数】

本校の教育課程 年間授業時数										新学習指導要領(全面実施)教育課程 年間授業時数														
	にんげん	くらし	ことば	すうがく	かがく	けんこう	げいじゅつ	チャレンジ	計	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語	道徳	特別活動	総合	外国語活動	計
1	68	68	170	170	70	136	136	0	818	306	0	136	0	102	68	68	0	102	0	34	34	0	0	850
2	70	70	175	175	70	140	140	0	840	315	0	175	0	105	70	70	0	105	0	35	35	0	0	910
3	70	70	210	175	70	140	140	0	875	245	70	175	90	0	60	60	0	105	0	35	35	70	35	980
4	70	70	193	157	70	122	123	70	875	245	90	175	105	0	60	60	0	105	0	35	35	70	35	1015
5	70	105	193	157	105	122	123	70	945	175	100	175	105	0	50	50	60	90	70	35	35	70	0	1015
6	102	102	187	153	105	119	119	68	955	175	105	175	105	0	50	50	55	90	70	35	35	70	0	1015
計	450	485	1128	987	490	779	781	208	5308	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	140	209	209	280	70	5785
新教育課程比	-218	-105	-537	35	143	-52	-52	208	-626															-477

7領域と「たんれん（帯時間で行うため時数に含まない）」、「チャレンジ」で行う本校の年間総時数は、新教育課程での年間総時数と比べて477時間少なく設定している。

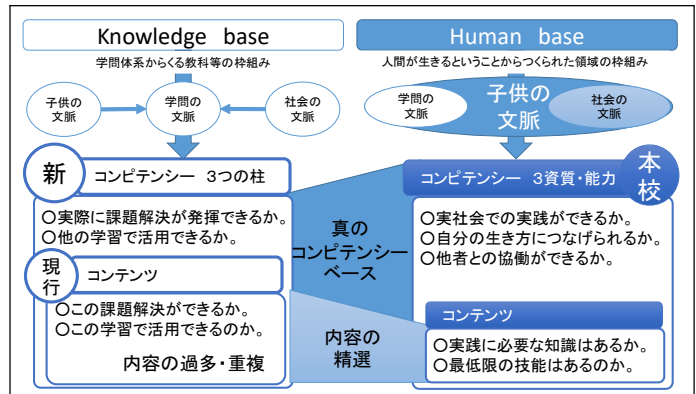
4 研究内容

(1) 教育課程の内容

新学習指導要領の改訂の主眼は、内容重視（コンテンツベース）から資質・能力重視（コンピテンシーベース）といわれている。このことは、「知る」ことを通して、対象に対する「関わり方」が洗練される

ということの意味しており、「どのような問題解決を実際に成し遂げることができるのか」を問うものとして取り上げられている。これは今までの教育課程における「子供たちが社会的成功や人間的成長、よりよい社会の創造者として寄与していくためには多くの知識が必要」という形式陶冶に偏っていた反省ともいわれている。確かに「物事を知れば、知るほど使える」といえる部分はあるが、現状は「いかに知ったのか」ということを考えることなく、知識及び技能があれば転移すると想定されて教育課程がつくられている。しかし、このような転移はそう簡単に起こらないことが、全国学力・学習状況調査からも明らかになっている。だからこそ、内容という知識及び技能のまとまりから、資質・能力へと重きを置いた教育課程編成が望まれている。

このような背景から、新教育課程においても資質・能力が重視されているが、教科等を見直すことなく、維持したままの状態、教科等の内容に依存したいわば知識重視 (Knowledge base) になってしまう。わたしたちが求める教育課程は現実の文脈に沿った学習が行える人間重視 (Human base) が必要であり、それは教科等を横断する学びもしくは教科等の範囲を超える学びが必要とされている。すなわち、このような資質・能力を重視する背景からも真のコンピテンシーベースを目指すには、学びの文脈を子供中心に転換していく必要がある (図1)。



【図1 Knowledge baseとHuman baseの比較】

子供の文脈を重視するとは、子供たちの学ぶ欲求を中心とし、現代的課題とともに、学問体系から来る学びを子供の学びの道筋に位置付けていくことである。文脈には「子供の文脈」「社会の文脈」「学問の文脈」の3つがあると考えられる。まず、「子供の文脈」とは子供たちがもつ「自由に自分で」「探し求めたい」という学びの道筋のことである。「社会の文脈」とは、人間が社会的存在であることから現代的課題を基にした社会からの道筋である。これは新学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」につながっているものでもある。「学問の文脈」とは学問体系からくる学びの道筋のことである。学問を重視しつつも、教科等に根ざした伝統的な課題からより現実的な課題へ、内容の系統から子供の欲求へと変革する新教育課程のさらにその先の教育を目指していく。

そこで、子供の文脈を重視した教育課程を編成していくにあたって、5つの視点から見直した。

① 「人間存在の原理」の視点

人間が生きる文脈を整理し、実存的側面から自己内省、省察、目標設定など (人間が人としてよりよく生きていくための内容)。文化的側面から言語、芸術、数学、科学、運動や食など (人間が先人から受け継ぎ守り発展させてきた叡智を学び、これらのことを礎にして作り出すような内容)。社会的側面から人間関係や環境、経済、社会などとの関わりなどである。

② 「諸外国の教育課程」の視点

フィンランドやオーストラリアなどの汎用的な資質・能力育成に早くから研究を進めた国々は、実例に基づいた教育などの総合学習などが重視され、その分、内容が精選され、細分化された教育課程ではなく、教科等のまとまりが少なく構成されている特徴を踏まえる。

③ 「幼稚園教育課程」の視点

環境、言語、人間関係、健康、表現の5領域から教育課程が構成され、幼児の発達段階に沿って、複数の領域が同時に展開されている特徴や子供主体の育ちを重んじる教育が我が国の幼稚園教育を参考にする。

④ 「先進校での取組」の視点

奈良女子大学附属小学校と上越市立大手町小学校の教育課程を分析し、大胆な教育課程改革が可能であることから、教育課程づくりの参考にする。

⑤ 「脳科学」の視点

ハワード・ガードナー氏の研究による多重知能理論とガードナー研究の第一人者でもあった本校元校長永江誠司氏が示した、人間は単一の知能ではなく、8つの独立した知能があり、それらは関連させたり統合させたりする学びの中で強く確かに育つという脳の特性を踏まえる。

そこで、7つの領域を仮説設定し、3つの教育課程の編成原理を①子供の文脈を重視した内容の精選、

②子供自らによる学びの選択、③子供の自己内省と省察とした。

① 子供の文脈を重視した内容の精選

本校では、子供の文脈を重視していく上で、社会の文脈と学問の文脈を取り入れることができるようにしていく。そうすることで、内容そのものの全体的な見直しをおこなうことができると考えている。その

ために、まず新学習指導要領の内容を7つの領域の観点から、移行・統合・削除などの措置を決定していく。移行とは、他領域や他学年に内容を移していくことである。統合とは、いくつかの内容を集約したり、まとめたりすることである。削除とは、部分的な削減と全体的な削減の2つのことである。

このように内容の精選を7つの領域の学習指導要領試案に盛り込む。すなわち、領域という複数の視点から、内容の精選を図ることで、新学習指導要領にもある内容の重なりなどを確認していく。

具体的には、まず、新学習指導要領における13の教科等ごとに、7領域の学習内容に沿って、どのような措置を講じるのかを考える。ここでは、教科等はすべての領域の内容の観点から見て措置を考えることとする。次に主に分析する領域を分担し、次のように内容の精選を図ることができるようにした。

◆ 内容の措置

措置は、「①現状維持、②削除・削減、③集約・統合、④他領域へ、⑤他学年へ、⑥新規追加」の6つから選択する。このことによって、領域間を通じての必要性や内容の重なり、発達段階との整合性の観点から内容を整理することができる。これらを基に内容自体を精選することができる。

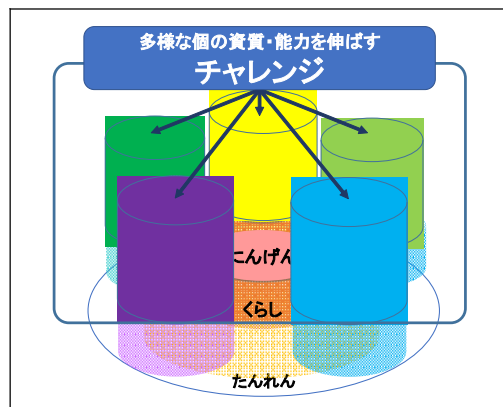
◆ 改訂理由

改訂理由は、「A現代社会の要請、B幼・小・中・高のつながり、C学問体系、D学習理論、E3年間の子供の育ち、F基礎と活用、Gその他」の7つである。例えば、国語科においては3年次までの研究成果を基に第1、2学年(1)言葉の特徴と使い方における「ア言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと」については、③集約・統合という措置のもと、英語との関連を図っている。その理由としては「C言語教育の研究で、母語と外国語との効果的運用によって、ことばへの気付きが促されることが実証されているため」として、有用な関連統合が内容精選に生かされている。他領域においても、すべての学習指導要領を分析することを通してさらに実効性の高い内容の改善を図っている。

② 子供自らによる学びの選択

◆ 「チャレンジ」の新設

チャレンジとは4～6年生の子供たちの個性に応じた領域学習の発展的な学びである。多重知能理論でも明らかのように子供一人一人が得意とする知能は違っている。教育課程の中で、子供たちそれぞれの個性を生かして、自分の資質・能力を磨き伸ばすことが重要である。そこで我が国においても実施された選択教科などの課題を克服する上においても教育課程内に個々の多様な資質・能力を伸ばす「チャレンジ」を位置付ける。そうすることで、教育課程の中で、子供たちそれぞれの個性を生かして、自分の資質・能力を磨き伸ばしていくことができるようにする。チャレンジはクラブ活動と比べると望ましい人間関係を構築していくよりもむしろ、個の学ぶ欲求に応える形での活動を重視する。当然小集団や集団でのコンクールや大会出場などの目標設定はあってもその出発点は個の学びの選択である。子供たちが主体となる活動を大切にしている。



【図2 チャレンジを位置付けた教育課程】

◆ 「たんれん」の充実

子供の個性に合わせて、最適化させた学びを実現し、子供の実態に合った動的・静的な学習を行う。子供一人一人に合った学習を提供する。具体的には、次のように進める。

まず、スタートはコグニサイズと呼ばれる動的な活動におけるフラッシュカードを行う。ここでは単にカードを唱えるだけでなく、手拍子を入れて小気味よくカードを読んだり、ジャンプや足踏みなどの身体的な動きを取り入れたりするなどのバリエーションを充実させる。多様な方法で充実した活動にしていくことで、さまざまな子供たちの特性に合わせていく。次に、繰り返し音読したり、暗唱したりする活動を取り入れる。その際にも単に群読をおこなうだけでなく、連れ読みや班読みなどのアクセントを入れることで、子供たちの興味・関心を湧かせることができる。さらに何を読むのかについても一人一人の特性に合わせて、一週間程度で変えていくことが充実にもつながる。最後に、現時点でのICTなどのハード面が整っていない状況においては、それぞれのレベルや課題に合わせたプリント学習が仕組める。これらのプリントは、個の実態に応じられるように、WEB上の問題データベースに教師がアクセスして、複数枚準備しておき、それぞれの子供たち自身が必要な内容とレベルを選択して、学べる環境をつくる。苦手なものや課題が残るものについては、繰り返し取り組んだりして、個々の学習を展開していく。子供たちによっては苦手なことについて学び合ったり、教え合ったりすることも必要となる。ここでは学びを揃えるというよりも個に合わせることに重点を置く。

③ 子供の自己内省と省察の重視

自己内省とは、自分自身が立てた目標設定に向けて自分がどこまで高まっているのかということ自分の学びの足跡から俯瞰して観たり、自分自身で辿って観たりすることである。省察とは、自分自身を観たことからどのように自分の行い方や考え方に生かしていきたいのか思考することである。そのためには、領域「にんげん」の「マイタイム」を中核にすること、各領域での振り返りの日常化することを重視していく。

◆ 領域「にんげん」の「マイタイム」の重視

学習者が自己内省と省察をおこなっていくためにも重要になる領域が「にんげん」である。先述したように、領域「にんげん」は教育課程上の要となっているとともに、核（コア）の部分を担当。この領域「にんげん」の中においても、特に重要な役割を果たす内容として、「Aわたし」に位置付けられた「マイタイム」がある。「マイタイム」は自分の変化を自ら見取り、「ありのままの自分」を見つめ、深い自己肯定感を育む時間でもある。そのために、自分のよさや課題を基に、自らを方向付ける「向上性」を育むことを重視する。このことは、子供たちが各領域の学習や日々の生活から自分自身の成長や学びのプロセスを把握する上において重要な役割を担っているといえる。また、「向上性」の育成においては、特に子供たちの「自己肯定感」を深めることを重視する。諸富祥彦氏によると「自己肯定感」とは、善悪を超えた次元で自分を受け入れ、自己の存在のそのものの価値を捉えることであるとしている。すなわち、「ありのままの自分」のよい面とともに、伸び悩んでいる面にも目を向けることが、この深まりのためには重要である。このことが「自分を成長させたい」「自分を向上させたい」という欲求を生まれさせる。それぞれの子供たちが自分の目標や高めたい資質・能力によって自ら振り返ることや目標設定する内容を選択し、自己更新を進めていくことができるようにする。このように子供たちが独自の学びを積み重ねていくことに「マイタイム」の価値がある。そこでは、子供たちがメタ認知を働かせ、自らを成長の轍へと招き入れる営みが繰り返されていく。しかし、そのような独自の学びが展開される中でも、子供たちが振り返ったり、目標設定をしたりする中で、視野が狭くなりすぎないように多角的に自己を見つめていけるものとしての各領域の学びと関連化を図る。

◆ 各領域の学習での振り返りの日常化

各領域の学習における振り返りも重視する。子供たちが目標設定した姿と今の自分の姿がどのくらいかということや、今どのくらい自分は歩みを進められているのかを捉える。すなわち、目標を絵に描いたものにするのではなく、常に短いスパンで振り返る、自己内省と省察を日常化していく。そうすることによって子供たちは「向上性」を原動力とした文脈を自分自身の力で描けるようにしていく。

このような子供の文脈を重視した教育課程の中で、質の高い学びを求めていく。

7領域による教育課程を編成は次の通りである。

【表2 7領域の特徴】

にんげん	人間としての学びである、人格の完成に直接向かう、全領域の核となる領域である。本領域では、自己内省を繰り返し、多様な他者と協働的に実践する活動を通して、人間として生きる価値を見だし、自己形成を図る主体を養うことを目指す。
くらし	子供と生活や社会との接点を基に各領域を関連させる横断の役割を担当領域である。本領域は、日常や社会の生活における問題を見だし解決に向けて参画する活動を通して、日本を土台に世界に貢献する主体としての自覚や責任を培うことを目指す。
ことば	過去と未来、自分と世界の人と人がつながるために必要な言語という文化を学ぶ領域である。本領域では、ことばに関する課題を捉え、その解決を図る言語活動を通して、主体的なことばの使い手を養うことを目指す。
すうがく	人間の世界や地球、宇宙の原理を明らかにする、数、量、形という文化を学ぶ領域である。本領域では、数や形に親しみ事象を数理的に捉え、問題を他者と共に解決する活動を通して、自ら問いを見だし、直観的、論理的に推論する力を身に付けることを目指す。
かがく	自然や科学技術という未来を生きる人間に欠かせない文化を学ぶ領域である。本領域では、自然の事物・現象に親しむことから課題を立て、課題解決に向けて粘り強く探究し、知を再構成しながらより妥当な考えを創り出す力を養うことを目指す。
げいじゅつ	自らの表現欲求や人間が生み出してきた芸術の中で生まれてきた美の文化を学ぶ領域である。本領域では、感性を働かせ、ひと・もの・ことから美を感じたり、イメージしたことを造形や音楽を中心に表現したりする活動を通して、生活や社会の中の美と豊かに関わることを目指す。
けんこう	子供の心身の健康という生きる上での基盤となる自立的な生活を営む上において重要な領域である。本領域では、自分の身体や生活環境に関わる課題解決に向けた体験的な活動を通して、望ましい生活行動を実践しようとする態度を身に付けることを目指す。

(2) 研究の経過

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業実践から、「未来社会を創造する主体」へとつながる子供の姿を集積し、新設領域におけるめざす子供像を具体化。 ・ 新設領域の内容のスコープとシーケンスについて明らかにし、指導方法の在り方を探った。 ・ 年間指導計画（試案）作成。 ・ 福岡教育大学、福岡県・福岡市教育委員会と連携し、研究内容の方向性や妥当性を明らかにした。 ・ 福岡教育大学、福岡県・福岡市教育委員会等の学校外部のメンバーで構成する「運営指導委員会」を開催し、研究全体を評価し、改善の手がかりを得た。 				
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年次の研究により明らかになった課題を整理し、それを解決するための研究組織を立ち上げた。（1年次研究での課題） <table border="1" data-bbox="311 436 1430 492"> <tr> <td>◆未来創造型の資質・能力の見直し</td> <td>◆設定した6領域の内容の見直し</td> </tr> <tr> <td>◆年間指導計画（試案）の付加・修正</td> <td>◆評価内容・方法の修正</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年間指導計画（試案）をもとに、各領域での題材配列によって、資質・能力がどのように育成されているのかについて明らかにした。 ・ 各領域が資質・能力育成にかかわってどのように関連しているのか明らかにした。 ・ 子供たちが資質・能力を旺盛に働かせるための状況づくりの条件について各領域の授業を通して明らかにした。 ・ 児童意識調査による評価だけではなく、各領域の題材ごとの評価内容と方法を明らかにした。 ・ 第2年次の成果発表の場として、教育研究発表会を開いた。 ・ 「運営指導委員会」を開催し、研究の全体を評価し、改善の手がかりを得た。 	◆未来創造型の資質・能力の見直し	◆設定した6領域の内容の見直し	◆年間指導計画（試案）の付加・修正	◆評価内容・方法の修正
◆未来創造型の資質・能力の見直し	◆設定した6領域の内容の見直し				
◆年間指導計画（試案）の付加・修正	◆評価内容・方法の修正				
第3年次	<p>(内容面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆学びを強める領域の再編→「自分づくり」と「文化の継承・創造」の視点から7領域を編成 ◆学びを強める領域の関連→学年テーマを設定することで、領域の関連を見いだした。 ◆学びを支える時間の設定→将来必要となる知識・技能を愉しく定着する「たんれん」の時間を設定 <p>(運営面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆学習指導要領本校版作成に向けた「学習指導要領作成」部の設立、学年主任会及び領域部会と連携 ◆学習評価の充実に向けた「評価」部の設立、学年主任会及び領域部会との連携 				
第4年次	<p>(内容面)</p> <p>これまでのカリキュラム作成の編成原理の不鮮明さという課題から、次のように整理した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆子供の文脈を重視した内容の精選 <p>子供の文脈を中心に据え、そこで必要な内容を選び出し、重なりや無駄がないのか、新教育課程の内容表を分析していった。そこで、移行・統合・削除を行い、年間授業時数を各学年100時間程度削減</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆子供自らによる学びの選択 <p>子供が主体的に学びを選択することができるように、4～6学年には、半期で週4時間行うチャレンジを新設する。そのことで自分の特性を子供たち自身が伸ばしていけるようにする。また「たんれん」の中で問題データベースから選択し、自ら課題解決することができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆子供の自己内省と省察の重視 <p>領域「にんげん」の「Aわたし」を重視し、マイタイムノートで自分の資質・能力の高まりを自ら実感し、新たな志を立てることができるようにする。また、各領域の毎時間の終末段階での「振り返り」を重視し、各領域の特質に基づいた「振り返りの軸」を基に記述するようにする。</p> <p>上記の教育課程の中で「子供の文脈を重視した探求の学び」を実現することができるようにするために、①真正の課題、②テーマ学習とトピック学習、③学習のための評価を学習の中に位置付ける。</p> <p>(運営面)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆校内について <p>校内の研究組織に、学習指導要領作成部、評価作成部、学年年間指導計画作成部、領域年間指導計画作成部を新たに設定し、各部での分担や仕事内容を明確にさせ、効率化を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆校外について <p>運営指導委員会に國學院大學 人間開発学部（文部科学省 視学委員）田村 学教授に加わっていただき、全国的な視野で研究の方向性や課題についてご指導いただく。また、教育研究発表会には、文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 調査官 菊池 英慈氏、笠井 健一氏という教科の立場からもご意見いただくようにし、本研究についての多角的な分析を図る、</p>				

(3) 評価に関する取組

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「未来社会を創造する主体」の姿を、研究授業や日常生活の中から集積整理したレポートを作成し、各領域で目指す子供像や資質・能力について協議。 ・ 新設領域ごとの研修グループをつくり、指導内容や指導方法についての評価を学期ごとに行った。→年間30回程度の研修会実施 ・ 「未来社会を創造する主体」を育てるための資質・能力が児童にどのように育っているかを教師が見取った子供の姿から評価 ・ 教育課程や指導方法について「運営指導委員会」や教員で評価 ・ 第1年次の成果発表の場として研究会を公開。外部教員や研究者からの意見収集
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「未来社会を創造する主体」を育てるための資質・能力がどのように育っているかを教師が見取った子供の姿から評価 → 年2本の実証授業の実施（10月～12月、1月～2月） ・ 各領域部が作成した資質・能力表や年間指導計画について、各学年部で付加・修正し、指導内容や指導方法の評価 → 毎月1回程度の学年部研修会、毎月2回程度の領域部会で実施 ・ 教育課程の効果について、多様な評価方法で検証 → 毎週1回の研究部会で検証 ・ 「未来社会を創造する主体」にかかわる質問項目を設定し、児童及び教員を対象に調査。→ 児童に関しては、7月、11月、2月の年3回実施 ・ 教育課程や指導方法について「運営指導委員会」や教員で評価。 ・ 第2年次の成果発表の場として研究会を公開。外部教員や研究者からの意見収集 → 平成29年2月17日（金）・18日（土）実施

第3年次	<ul style="list-style-type: none"> 「未来社会を創造する主体」を育てるための資質・能力がどのように育っているかを、複数教師が見取った子供の姿から評価 → 年2本の実証授業の実施（10月～12月、1月～2月） 各領域部が作成した資質・能力表や年間指導計画について、各学年部で付加・修正し、指導内容や指導方法の評価 → 毎月1回程度の学年部研修会、毎月2回程度の領域部会で実施 教育課程の効果について、多様な評価方法で検証 → 毎週1回の研究部会で検証 「未来社会を創造する主体」に関わる質問項目を設定し児童及び教員に加えて保護者を対象に調査 → 児童に関しては、7月、11月、2月の年3回実施 教育課程や指導方法について「運営指導委員会」や教員で評価。 第3年次の成果発表の場として研究会を公開。外部の教員や研究者からの意見収集（昨年度は電子アンケートを実施） → 平成30年2月16日（金）・17日（土）実施
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> 「未来社会を創造する主体」を育てるための資質・能力がどのように育っているかを、複数教師が見取った子供の姿から評価。 → 年2本の実証授業の実施（10月～12月、1月～2月） 評価作成チームによる、実証授業でのルーブリックの計画、作成についての指導 「未来社会を創造する主体」に関わる質問項目を設定した児童及び教員質問紙調査に加えて、29年度より実施されている保護者を対象に保護者質問紙調査、保護者アンケート記述調査を実施 → 児童、教員に関しては、7月、11月、2月の年3回実施 → 保護者に関しても、7月、11月、2月の年3回実施（11月のみ、アンケート記述調査を第6学年児童の保護者に実施） 教育課程や指導方法について7月、11月、2月の年間3回の「運営指導委員会」。7～8月、11月、1月の年間3回の「共同研究会（参加者：研究協力者…大学、共同研究者…本校OB）」で評価、改善指導。 研究開発前（平成26年度）の全国学力・学習状況調査と研究開発後の結果を比較し、資質・能力の高まりが現行学習指導要領で見られる学力の向上にもつながるのか分析する。 第4年次の成果発表の場として研究会を公開。外部の教員や研究者からの意見収集 → 平成31年2月8日（金）・9日（土）実施

5 研究開発の成果

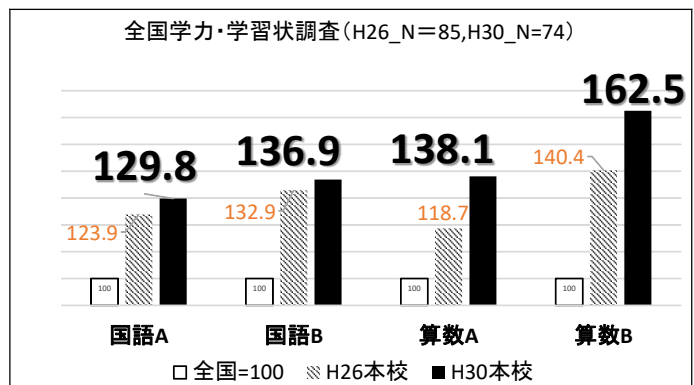
（1）実施による効果

① 全国学力・学習状況調査の研究開発前後の比較

※ 実施時期：平成26年4月、平成30年4月の計2回
 ※ 対象：6学年児童（N=85, N=74）
 ※ 分析方法：学年の傾向調査（集団分析）

研究開発以前の平成26年度全国学力・学習状況調査における本校児童の学力の実態は、国語Aの平均正答率が90.6（全国平均73.1），国語B平均正答率が73.9（全国平均55.6），算数Aの平均正答率が92.9（全国平均78.2），算数B平均正答率が82.0（全国平均58.4）であった。この結果から、本校では全国平均よりもかなり平均正答率が高いことが分かる。保護者の意識も高く、中学校への進学に際しての準備を行う児童も多いため、全国平均よりも高い傾向がある。しかし、これから子供たちが生きていくために必要な資質・能力を向上させるためには、子供の文脈を重視した教育課程に変え、特に内容を精選を行う必要がある。また同質問紙調査からは、平成26年度の時点では、子供たちは現代社会への関心の高さ、人や社会の役に立ちたいという貢献心、他者受容への意志をもっていることが明らかになった。しかし、どのように志をもって社会の中で生きていくのか明確でない子供がいることが分かった。また、いじめへの理解などに課題があることが明らかになった。

研究開発最終年度の平成30年度全国学力・学習状況調査における本校児童の学力は次の通りであった。国語Aの平均正答率が92%（全国平均70.9%），国語B平均正答率が75%（全国平均54.8%），算数Aの平均正答率が88%（全国平均63.7%），算数B平均正答率が84%（全国平均51.7%）であった。この結果から十分に本校児童は基礎的な学力を身に付けてことが分かる。また、特にB問題の向上が著しい（図2）。このことは、自分の出合った問題に対して粘り強く追究する学習や協働的に問題解決を図る活動、自分のよさや課題を分析する学習によって、当初望んでいた、学力の維持以上の向上という成果が表れたものであると考え。このことが、特に全国平均正答率が低かった国語B、算数Bの記述式の問題に対しての全国比（全国平均を100として）188.2ポイントという結果に表れている。



【図3 研究開発前後の全国学力・学習状況調査（国語、算数）の比較】

平成30年度には、「将来の夢や目標を持っていますか」や「地域社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか」や「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか」などの元々全国平均を上回っていた項目がさらに高まっていることが分かった。このことから、領域のダイナミックな学習の中で学校を超える価値ある学びを実現したことが子供たちの意識調査の変容につながったと考える。しかし、登下校などの現実的な問題もあり、地域行事には参加できていないことや現実の世界の厳しさも知った子供たちは全国平均を上回っているものの貢献心が向上していないことが明らかになった。

【表3 全国学力・学習状況調査 質問紙調査】

質問事項	26年度質問紙調査				30年度質問紙調査			
	1	2	3	4	1	2	3	4
将来の夢や目標を持っていますか	61	14	8	4	59	9	3	9
	71.3	16.5	7.1	4.7	79.7	12.2	4.1	4.1
今住んでいる地域の行事に参加していますか	70.7	18.0	7.6	5.9	68.2	16.9	8.6	6.2
	13	19	28	24	12	16	18	28
地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか	15.3	22.4	32.9	28.2	16.2	21.6	24.3	37.8
	37.5	30.2	18.8	13.5	35.7	26.7	18.2	18.2
地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか	36	31	12	9	30	35	7	2
	42.4	36.5	14.1	5.9	40.5	47.3	9.5	2.7
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか	25.1	37.9	25.7	11.2	26.9	37.0	24.5	11.6
	16	31	31	6	17	34	20	3
人の役に立つ人間になりたいと思いますか	18.8	36.5	36.5	7.1	23.0	45.9	27.0	4.1
	13.7	28.9	36.8	20.5	17.3	32.6	33.0	17.0
	68	12	3	1	66	5	3	0
	80.0	14.1	3.5	1.2	89.2	6.8	4.1	0.0
	82.0	14.3	2.5	1.1	85.9	10.9	1.9	1.1
	69	15	0	0	57	14	2	1
	81.2	17.6	0.0	0.0	77.0	18.9	2.7	1.4
	72.1	22.0	4.0	1.7	74.2	21.0	3.3	1.3

1:設問1 学校の児童数 2:設問2 学校の児童数の割合(%) 3:設問3 全国 国公立の児童数の割合(%)

② 児童の意識調査の変容（単年度）

- ※ 実施時期：平成30年7月，11月の計2回
- ※ 対象：全学年児童（N=425）
- ※ 分析方法：同児童の傾向調査（個人分析），学年の傾向調査（集団分析）
- ※ 各項目の数値は，5段階評価の5としたときの到達値

【表4 低学年の質問紙調査の推移】

資質・能力	項目	1年					2年				
		7月	11月	2月	差(2-7)	差(11-7)	7月	11月	2月	差(2-11)	差(11-7)
協働性 1	人の気持ち	4.76	4.74	4.52	▲ 0.24	▲ 0.02	4.84	4.81	4.80	▲ 0.04	▲ 0.03
協働性 2	意見の主張	1.95	1.63	1.89	▲ 0.06	▲ 0.32	1.60	1.60	1.57	▲ 0.03	0.00
協働性 3	役立つ人	4.96	4.87	4.93	▲ 0.03	▲ 0.09	4.92	4.81	4.80	▲ 0.11	▲ 0.10
協働性 4	自分の意見	4.61	4.54	4.28	▲ 0.33	▲ 0.07	4.60	4.44	4.53	▲ 0.07	▲ 0.16
協働性 5	人から好かれる	4.33	4.25	3.98	▲ 0.35	▲ 0.08	4.17	4.54	4.46	0.29	0.37
協働性 6	対立を避ける	1.96	1.62	2.04	▲ 0.09	▲ 0.34	1.88	2.10	2.17	0.29	0.23
協働性 7	意見を受け入れる	4.11	4.25	4.00	▲ 0.11	0.14	3.70	3.73	3.43	▲ 0.27	0.03
向上性 8	振り返り	4.43	4.48	4.33	▲ 0.10	0.05	4.25	4.45	4.33	0.08	0.20
向上性 9	自分のこと	4.43	4.70	4.46	0.03	0.27	4.55	4.58	4.49	▲ 0.06	0.03
創造性 10	探究心	4.50	4.47	4.18	▲ 0.32	▲ 0.03	4.38	4.46	4.59	0.21	0.08
創造性 11	自力解決	4.69	4.77	4.69	▲ 0.01	0.07	4.70	4.65	4.69	▲ 0.01	▲ 0.05
創造性 12	あきらめない	4.74	4.63	4.28	▲ 0.46	▲ 0.11	4.50	4.50	4.40	▲ 0.09	0.00
創造性 13	わかるまで	4.56	4.49	4.18	▲ 0.39	▲ 0.08	4.60	4.66	4.29	▲ 0.31	0.06
2.6反転	平均	4.16	4.11	3.98	▲ 0.18	▲ 0.05	4.05	4.10	4.04	▲ 0.01	0.05

<分析>

- 平均して，4ポイントを超えており，高い数値を示している。この結果から，低学年の子供たちの自己肯定感が高いことと，メタ認知が育っておらず，自己評価が甘くなりがちになるという傾向を表しているといえる。
- 1年生は「意見を受け入れる（協働性）」「自分のこと（向上性）」についての高まりが見られる。特に「くらし」や「けんこう」の学習の中で仲間や他者と力を合わせる経験が作用しているものと考えられる。
- 2年生は「人から好かれる，対立を避ける（協働性）」と「振り返り」などの高まりが見られる。このことから，特に「にげん」の学習において，自分の生活や学びの振り返りを行う，マイタイムノートの取り組みを重視しているからだといえる。
- 1年生においては，反転項目の質問の意味が分かっておらず，数値の変化が大きい。また，その他の項目についても1学期での自分のできることについての自己評価と比べると少しではあるが客観性が増しているため，数値の減りが見えているといえる。

【表5 中学年の質問紙調査の推移】

資質・能力	項目	3年					4年				
		7月	11月	2月	差(2-11)	差(11-7)	7月	11月	2月	差(2-11)	差(11-7)
協働性 1	人の気持ち	4.51	4.50	4.67	0.16	▲ 0.01	4.66	4.57	4.52	▲ 0.14	▲ 0.09
協働性 2	友達に合わせる	2.03	2.01	2.23	0.19	▲ 0.02	2.95	2.02	1.92	▲ 1.03	▲ 0.94
協働性 3	意見の主張	3.77	3.41	3.93	0.16	▲ 0.36	4.05	3.52	4.06	0.02	▲ 0.53
協働性 4	役立つ人	4.60	4.63	4.69	0.09	0.03	4.69	4.67	4.50	▲ 0.19	▲ 0.02
協働性 5	自分の意見	4.12	4.12	4.48	0.36	0.00	4.20	4.09	4.08	▲ 0.12	▲ 0.11
協働性 6	人から好かれる	3.94	3.84	3.83	▲ 0.11	▲ 0.10	4.07	4.21	3.78	▲ 0.29	0.15
協働性 7	対立を避ける	2.31	3.21	3.30	0.99	0.91	2.88	2.48	2.73	▲ 0.14	▲ 0.40
協働性 8	意見を受け入れる	3.66	2.95	3.60	▲ 0.05	▲ 0.70	3.99	4.04	3.92	▲ 0.07	0.06

向上性 9	振り返り	4.09	3.93	3.91	▲ 0.17	▲ 0.15	4.18	4.06	3.98	▲ 0.19	▲ 0.12
向上性 10	成功や失敗	4.14	4.13	4.08	▲ 0.07	▲ 0.01	4.30	4.22	4.17	▲ 0.13	▲ 0.08
向上性 11	行動を考える	3.88	3.95	3.95	0.07	0.07	4.02	3.71	3.77	▲ 0.25	▲ 0.31
向上性 12	自分のこと	4.10	4.14	4.03	▲ 0.07	0.04	3.94	3.87	3.72	▲ 0.22	▲ 0.07
創造性 13	探究心	4.24	3.98	4.04	▲ 0.19	▲ 0.26	4.12	4.15	3.97	▲ 0.14	0.03
創造性 14	自力解決	4.09	4.25	4.05	▲ 0.04	0.16	4.07	3.94	4.14	0.07	▲ 0.12
創造性 15	あきらめない	4.04	4.18	4.29	0.25	0.14	3.97	4.06	3.88	▲ 0.09	0.09
創造性 16	独創的発想	3.73	3.86	4.16	0.43	0.13	3.87	4.10	4.06	0.19	0.23
創造性 17	わかるまで	4.06	3.97	4.12	0.06	▲ 0.09	4.24	3.98	4.02	▲ 0.22	▲ 0.25
2.7反転	平均	3.84	3.83	3.96	0.12	▲ 0.01	4.01	3.86	3.84	▲ 0.17	▲ 0.15

<分析>

- 平均して、4ポイントを下回っており、低学年に比べると数値が低い。この結果から、発達段階として、比較することができるようになってくることで、他者理解ができるようになり、自分のこととできないことの判別が少しずつできていくといえる。
- 3年生は「自力解決、あきらめない（創造性）」についての高まりが見られる。特に「ことば」や「けんこう」での、創り出したり生み出したりする経験からの高まりであると考えられる。
- 4年生も「自力解決、あきらめない（創造性）」についての高まりが見られる。このことから、特に「ことば」「すうがく」の学習における学びの成果を実感しているといえる。
- 3、4年生においても、反転項目2の減少が見られた。この項目と同じく反転項目7との矛盾を感じて、思うような高まりを感じていない児童が多かった。
- 4年生においては、全体的な数値の減少が目につく。具体的思考から抽象的思考に切り替わる学習内容とメタ認知が発達し始める時期ということもあり、この時期に数値が下がることが顕著である。評価方法を1～3年生と4～6年生の発達段階に合ったものに代えていく必要がある。

【表6 高学年の質問紙調査の推移】

資質・能力	項目	5年					6年				
		7月	11月	2月	差(2-11)	差(11-7)	7月	11月	2月	差(2-11)	差(11-7)
協働性 1	人の気持ち	4.48	4.48	4.60	0.12	0.00	4.54	4.57	4.75	0.21	0.03
協働性 2	友達に合わせる	2.90	2.37	2.33	▲ 0.57	▲ 0.53	2.66	2.69	2.78	0.11	0.02
協働性 3	意見の主張	3.63	3.81	3.78	0.16	0.18	3.74	3.72	3.92	0.18	▲ 0.01
協働性 4	役立つ人	4.64	4.57	4.42	▲ 0.23	▲ 0.07	4.74	4.61	4.56	▲ 0.18	▲ 0.13
協働性 5	自分の意見	4.19	4.21	4.24	0.05	0.02	4.24	4.25	4.41	0.17	0.02
協働性 6	人から好かれる	3.79	3.68	3.77	▲ 0.01	▲ 0.11	3.94	3.97	3.78	▲ 0.16	0.03
協働性 7	対立を避ける	2.62	2.65	2.81	0.19	0.03	3.10	2.85	3.03	▲ 0.07	▲ 0.25
協働性 8	意見を受け入れる	3.91	4.29	4.12	0.21	0.38	4.07	3.96	4.00	▲ 0.07	▲ 0.11
向上性 9	振り返り	4.04	4.18	4.00	▲ 0.04	0.13	4.01	4.05	3.97	▲ 0.05	0.03
向上性 10	成功や失敗	4.13	4.41	4.30	0.17	0.28	4.22	4.28	4.24	0.02	0.06
向上性 11	行動を考える	3.73	4.00	3.83	0.10	0.27	3.81	3.82	3.92	0.11	0.01
向上性 12	自分のこと	3.97	4.24	3.97	▲ 0.00	0.27	4.19	4.29	4.16	▲ 0.04	0.10
創造性 13	探究心	4.24	4.07	4.08	▲ 0.16	▲ 0.17	4.15	4.08	4.19	0.04	▲ 0.07
創造性 14	自力解決	4.10	4.12	3.87	▲ 0.23	0.01	4.03	4.14	4.09	0.06	0.11
創造性 15	あきらめない	4.22	4.10	3.97	▲ 0.25	▲ 0.12	4.03	4.36	4.32	0.29	0.33
創造性 16	独創的発想	3.97	3.94	3.95	▲ 0.02	▲ 0.03	3.87	3.76	3.80	▲ 0.07	▲ 0.11
創造性 17	わかるまで	4.12	4.16	3.95	▲ 0.16	0.05	4.18	4.08	4.14	▲ 0.04	▲ 0.10
2.7反転	平均	3.92	3.96	3.88	▲ 0.04	0.04	3.97	3.97	4.00	0.03	▲ 0.00

<分析>

- 平均して、4ポイントを下回っているが、数値の低下はさほど見られず、安定的である。資質・能力の構成要素が自分自身のよさになりつつある児童が多い。
- 5年生は「振り返り、成功や失敗、行動を考える、自分のこと（向上性）」についての高まりが見られる。特に「にんげん」での自分自身のよさや課題を分析的に考える「Aわたし」の学習や、学びの中での振り返りが充実してきたことを物語っている。
- 6年生は「あきらめない（創造性）」についての高まりが見られる。学校でのリーダーとしての自覚や様々な困難にも自ら立ち向かうことができる強さを実感していると言える。また「くらし」の学習では学校を超える学びの中で、大人と対峙しながら学んでいる成果が表れている。
- 5年生においては、反転項目2の減少が見られた。よい意味での「友達に合わせる」ということの意味を理解できていないものと考えられる。

③ 児童の意識調査の変容Ⅱ（経年変化）

- ※ 実施時期：平成27年7月、11月、平成28年2月、7月、11月、平成29年2月、7月、11月、平成30年2月、7月、11月、平成31年2月の計12回
- ※ 対象：第6学年児童（研究開発最終年度に第6学年となる児童、N=75）
- ※ 抽出項目は、計12回の調査で高い数値を維持している項目

【表7 第6学年の経年変化の推移】

資質・能力	項目	平均値	昨年度との差
-------	----	-----	--------

協働性	①自分以外の他の人の気持ちをよく考えたいと思う。	4.56	▲0.09
	④周りの人のために、役立つ人になりたいと思う。	4.67	0.01
	⑤いつも自分の意見をもつようになっている。	4.24	▲0.06
向上性	⑫自分のことについてよく考える。	4.24	0.06
創造性	⑬「なぜ?」「どうして?」と思ったことをよく調べる。	4.11	▲0.03
	⑭難しいことでも、人に頼らず、自分の力でやろうとする。	4.09	▲0.02
	⑮失敗してもあきらめないで、なぜ失敗したのか、その理由を考える。	4.19	▲0.01
	⑰わからないことはわかるまでやるほうだ。	4.13	▲0.03

本年度の特徴は、以下の3つである。

- 昨年度より数値が高かった項目が、本年度も高い数値を維持している。高学年に入るとどの項目も自己評価が下がる傾向にあるが、これらの項目については、自分たち自身を肯定的に見ている。
- 向上性とも関わりの深い協働性「④周りの人のために、役立つ人になりたいと思う。」が非常に高い数値を示している。これは貢献心の表れであるとともに、自己実現と社会貢献を考える「志」を高くもっているとも見て取れる。
- 受験期にありがちではあるが、協働性「①自分以外の他の人の気持ちをよく考えたいと思う。」については自分のことだけに終始している傾向を自ら考えているようである。元々高い数値をもっているところであるので、心理的な支援を必要としているとも見て取れる。

② 研究開発に取り組んだ結果、見られた子供の姿の変容

- 7領域の精選した内容によって、言われたことを忠実に実行しようとする子供の姿から、自分で時間を決め、自分たちのアイデアを生かして、教師の想像を超える学びを展開する姿も見られた。
- 選択した学びによって、たんれんやチャレンジだけでなく、課題を追究する際に、家庭でも自分で資料を集めたりまとめたりする能動的な子供たちの姿も見られるようになった。
- 自己内省を重視したことで、名古屋大学大学院 教授 速水敏彦氏が提唱する仮想的有能感にあてはまる児童の姿が減少し、他者との比較、競争から、自分の変化を大切にする子供たちの姿が増えてきた。

③ 教師への効果

- 7領域の教育課程によって教科の枠などに子供たちがとらわれていない様子から、よい意味で子供の姿「～しなければならない」という意識が「～したい」というものになっている。
- 7領域という新たな枠組みを個人研究ではなく、大学を含めた領域というチームで研究するようになった。領域内で審議検討した結果を要項に反映し、共同研究会で、部で練ったものを提案できた。
- トップダウン方式の研究スタイルが、よい意味でボトムアップで行われるようになってきた。

④ 保護者等への効果

- 保護者質問紙 (N=61) では、特に創造性と協働性の高まりを感じていた。「広い分野の勉強をするので子供の知識が深まり、親も楽しめる授業だった。」や「自分もった興味はいろいろなことにつながることでより意欲的に取り組めた」などのコメントが多くあった。
- 記述式アンケート調査結果 (N=61) では、研究開発学校4年間の子供たちを見た6年生の保護者から全員から、心配する点はあったものの本校の教育課程はよくなったと答えている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

研究実施上の問題点は3点である。

- 大坪靖直教授のご指導の下、平成27年度から追跡調査してきた児童質問紙調査では、高学年になるほど自己評価が厳しくなることで思ったほど伸びが見つけられにくかったことである。
- 教科の学びとは異なる、領域の学びの様子が一部の保護者や地域などにうまく伝わらなかったことである。領域の学びの様子は、学校だよりや参観は非常に喜ばれていたが、より多方面に発信する手段を考える必要がある。
- 公立学校への汎用性である。領域の授業を紹介すると、価値はあるが実施が難しいというご意見が多くあった。附属の使命からもこの問題を解決する必要がある。

そこで、次の3点が今後の課題である。

- ◎ 学習のための評価から近年注目されつつある、学習としての評価を初等教育課程においても実践していく必要がある。
- ◎ ホームページや広報誌、あらゆるメディアなどでのさらなる発信が必要である。
- ◎ 公立学校へ少しでも成果を還元することができるように、研究の汎用性を高めていけるような新たな学習理論の構築が必要である。

福岡教育大学附属福岡小学校 教育課程表 (平成30年度)

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動	新教科							チャレンジ	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育					にんげん	くらし	ことば	すうがく	かがく	げいじゆつ	けんこう		
第1学年	0 (-306)	-	0 (-136)	-	0 (-102)	0 (-68)	0 (-68)	-	0 (-106)	0 (-34)	-	-	0 (-34)	68 (+68)	68 (+68)	170 (+170)	170 (+176)	70 (+74)	136 (+136)	136 (+102)	-	818 (-32)
第2学年	0 (-315)	-	0 (-175)	-	0 (-105)	0 (-70)	0 (-70)	-	0 (-105)	0 (-35)	-	-	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	175 (+175)	175 (+181)	70 (+70)	140 (+140)	140 (+140)	-	840 (-35)
第3学年	0 (-245)	0 (-70)	0 (-175)	0 (-90)	-	0 (-60)	0 (-60)	-	0 (-105)	0 (-35)	-	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	210 (+210)	175 (+181)	70 (+70)	140 (+140)	140 (+140)	-	875 (-70)
第4学年	0 (-245)	0 (-90)	0 (-175)	0 (-105)	-	0 (-60)	0 (-60)	-	0 (-105)	0 (-35)	-	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	70 (+70)	193 (+193)	157 (+164)	70 (+70)	123 (+123)	122 (+122)	70 (+70)	875 (-105)
第5学年	0 (-175)	0 (-100)	0 (-175)	0 (-105)	-	0 (-50)	0 (-50)	0 (-60)	0 (-90)	0 (-35)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-35)	70 (+70)	105 (+105)	193 (+193)	157 (+164)	105 (+105)	123 (+123)	122 (+122)	70 (+70)	945 (-35)
第6学年	0 (-175)	0 (-105)	0 (-175)	0 (-105)	-	0 (-50)	0 (-50)	0 (-55)	0 (-90)	0 (-35)	0 (-35)	0 (-70)	0 (-35)	105 (+105)	102 (+102)	187 (+187)	153 (+164)	105 (+105)	119 (+119)	119 (+119)	68 (+70)	958 (-22)
計	0 (-1461)	0 (-365)	0 (-1011)	0 (-405)	0 (-207)	0 (-358)	0 (-358)	0 (-115)	0 (-597)	0 (-209)	0 (-70)	0 (-280)	0 (-209)	450 (+453)	1128 (+1128)	1318 (+1318)	987 (+987)	490 (+490)	781 (+781)	779 (+779)	208 (+208)	5308 (-337)

学校等の概要

1 学校名、校長名

フクオカキョウイクダイガク フ ソクフクオカシヨウガツコウ
 学校名 福岡教育大学附属福岡小学校
 校長名 豊 篤 啓 司

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 福岡県福岡市中央区西公園12-1
 電 話 092-741-4731
 F A X 092-722-2553

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
69	2	71	2	70	2	74	3	69	3	72	3	425	15

※ 第4学年～第6学年の3学級編制の内訳は、1、2組が通常学級で、3組が帰国子女学級である。よって、3学級のうち3組は、児童数が少ない編制となっている。

※ この表以外に特別支援学級があり、1・2年合同、3・4年合同、5・6年合同の3学級の編制である。1・2年生は5名、3・4年生は4名、5・6年生は5名の計14名である。

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1	0	1	0	25	0	1	0	1	2
A L T	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	5	0	38						